

兪鎮午の短篇小説「黄栗」と「かち栗」について

白 川 春 子

目 次

1. はじめに
2. 作品の検討
3. おわりに

1. はじめに

筆者は以前、「兪鎮午の日本語小説について」¹⁾と題して、朝鮮近代文学の代表的な知識人作家である兪鎮午(1906~1987)が、日本語で書いた小説について論じたことがある。その論文執筆の過程で、兪鎮午の日本語小説「かち栗」(《海を越えて》、1939年9月、pp.84~85)の存在が新たに確認された。²⁾しかしこの作品は、朝鮮語で書かれた作品である「黄栗」(《三千里》、1936年1月、pp.277~279)を翻訳、改作したものであることが判明したため、上記の論文の考察対象とはしなかった。

また筆者はこれまで、兪鎮午の代表作である小説「金講師とT教授」について、初出の《新東亜》版(1935年1月、朝鮮語)とそれまであまり取り上げられなかった、日本の文芸雑誌《文学案内》に掲載された日本語版(1937年2月、作者自訳)との比較、検討を試みてきた。³⁾この論考を通して、小説「金講師とT教授」の初出の朝鮮語版(1935.1)と日本語版(1937.2)は、全体の構成は違わないが、全面的に書き改められていることが確認された。特に、主人公・金講師やT教授など、主な登場人物の描写については、顕著な違いが認められた。また、朝鮮語版に比べて日本語版の方に加筆部分が多く、より洗練された描写が見られた。さらに日本語版の加筆・変更部分では、日本の植民地下の朝鮮を意識させる表現が多く見受けられた。そしてそれらは、当時の日本の読者を意識して、書き改められたものではないかと注目されたのである。

兪鎮午の日本語小説「かち栗」(1939.9)は、前述したように、その内容を見ると、彼の朝鮮語小説「黄栗」(1936.1)を翻訳・改作したものであると推測される。そこで今回、本稿では、この二作品の比較・検討を試みることにする。

まず、作者、兪鎮午の略歴について、作品「黄栗」(1936年1月)と「かち栗」(1939年9月)が発表された前後の時期を中心に見ておきたい。

朝鮮の開化派の啓蒙家として有名な兪吉濬(1856~1914)の名門一族の家中で、1906年、ソウルに生まれた兪鎮午は、1924年(18歳)に京城帝国大学予科文科に入学し、1926年(20歳)、京城帝国大学法文学部法学科に入学する。拙稿「兪鎮午の日本語小説について」⁴⁾でも述べたが、兪鎮午は京城帝大予科時代には、日本語文の校友会誌《清涼》に、日本語で翻訳詩や評論を発表しており、彼が日本語を通じて文学を学び、彼の最初の文学作品が日本語で書かれている点は注目される。

また、京城帝大在学中の1927年(21歳)には、朝鮮語で短篇小説「復讐」(《朝鮮之光》6号、1927年4月)、「スリ」⁵⁾(《朝鮮之光》67号、1927年5月)、「把握」(全3回、《朝鮮之光》69~71号、1927年7~9月)等を発表し、次第に朝鮮の文壇でも注目されていく。

さらに1929年(23歳)京城帝国大学を卒業した兪鎮午は、同年、同大学刑法研究室助手となり、1931年(25歳)には京城帝大予科講師となって、当時の朝鮮人としては異例のエリートコースを歩んでいくことになる。そしてこの頃の体験を基に、彼の代表作「金講師とT教授」が書かれたのではないかと考えられる。

作家としての活動を続けながら、兪鎮午は1932年(26歳)普成専門学校講師となり、1935年1月、朝鮮語雑誌《新東亜》に「金講師とT教授」を発表し、翌1936年1月に、本稿で取り上げる「黄栗」

が朝鮮語雑誌《三千里》に掲載される。後ほど引用する《三千里》(1936年1月)の「作家點描」にもある通り、兪鎮午はこの頃すでに「朝鮮文壇の著名な作家」であった。そして翌1937年2月に、日本の文芸雑誌である《文学案内》に「金講師とT教授」の日本語版を發表する。また、本稿で取り上げる日本語作品「かち栗」が1939年9月に日本語雑誌《海を越えて》に掲載される2か月前の1939年7月に出版された『兪鎮午短篇集』(学芸社)(朝鮮語)には、《文学案内》に掲載された日本語版を底本としたと考えられる「金講師とT教授」(朝鮮語)が収録されているのである。こうして見ると、兪鎮午は作品「黄栗」と「かち栗」を執筆していた頃に、「金講師とT教授」を日本語に書き改め、また、日本語に書き改めた「金講師とT教授」を基に初出の《新東亜》版とは異なる朝鮮語の「金講師とT教授」を執筆していたであろうことが推測される。

兪鎮午は普成専門学校法科で教鞭を執りながら、1941年頃まで朝鮮語で多くの作品を發表するが、「かち栗」が發表された1939年頃から日本語による作品(小説、評論、隨筆等)を發表するようになっていく。なお、1940年から1944年にかけて兪鎮午が發表した日本語小説については、拙稿「兪鎮午の日本語小説について」⁶⁾を参照されたい。

兪鎮午は、植民地末期になると、朝鮮語ではなく日本語で作品を書かざるをえなくなっていくのであるが、その節目の頃に發表されたのが「かち栗」であるという点も重要であると言えよう。

2. 作品の検討

まず、1936年1月に「黄栗」(朝鮮語)が掲載された雑誌《三千里》は、1929年6月12日に創刊された朝鮮の総合雑誌で、1941年11月1日まで発行(通巻150号)され、1942年5月1日から《大東亜》と改題された。⁷⁾ また、1936年1月の新年号の目次を見ると兪鎮午の他、廉想涉、李光洙、張赫宙、李孝石等の当時の朝鮮の著名な作家の名前が並んでいて、編集後記には、次のように書かれている。

創立第八年を迎える本誌「新年號」に誇れるの

は、我が文壇の巨星、近二十氏の作品を集め載せたことである。寂寥だった文壇に近来に負う大きな収穫であると考える。⁸⁾

さらに、同誌277頁の最初には「作家點描」と題して、兪鎮午の写真と共に次のような作家紹介がある。

我文壇の短篇作家として、すでに著名な氏は、故郷が京城である。京城高等普校を終えた後、大学予科と京城帝大法科を首席で卒業、その後すぐ普成専門学校の教授に就任、年二十八。近聞するに、近者に短篇集が某書肆ほかの手により出版されるであろうから氏の佳作がここに集まるであろう。⁹⁾

先に述べたように、実際、兪鎮午は1929年(23歳)京城帝大卒業後、同大学刑法研究室助手を務め、1931年(25歳)京城帝大予科講師を経た後、1932年(26歳)に普成専門学校講師となっている。また、1939年には学芸社より『兪鎮午短篇集』が、さらに1940年には漢城図書より、兪鎮午の短篇小説9篇と長篇小説「受難の記録」が収録された『春』¹⁰⁾が出版されている。後者の中に、本稿で取り上げる「黄栗」も収められており、作品「黄栗」は小品ながら、作者、兪鎮午が大切にしていた作品であると考えられる。

次に1939年9月に「かち栗」(日本語)が掲載された雑誌《海を越えて》は、財団法人拓殖奨励館が発行した雑誌で、朝鮮の総合雑誌《三千里》と同じく、後に雑誌名が《大東亜》となる。また「かち栗」の掲載された1939年9月号は、「現地特輯「時局下の朝鮮」」となっていて、「編輯者からの挨拶」と題した編集後記には「朝鮮出張中は現地官民各位特に総督府の文書課及び警務局には非常な御世話になりました。深く感謝します。大體本號は無条件に文書課にプランを立てて頂いた。内容が充實してゐるのはそのお蔭です。」(93頁)とあり、《海を越えて》1939年9月号は朝鮮総督府の文書課が主に企画したものであることがわかる。このような雑誌に兪鎮午の日本語で書かれた短篇小説「かち栗」が掲載されたことは大変興味深いと言えよう。

それでは作品「黄栗」と「かち栗」を詳しく検討

していく。

まず題名についてであるが、「黄栗」には（都會のあるスケッチ）¹¹⁾という副題がある点、また作者名についても「黄栗」では「玄民 兪鎮午」とあり、「玄民」という号がある点が違っている。これに対して「かち栗」では「かち栗 兪鎮午」という題名と作者名が京城らしき風景と「かち栗」の主人公とおぼしき老人を描いた挿絵の中に組み込まれている点が注目される。

筆者は以前、兪鎮午の代表作「金講師とT教授」の朝鮮語版と日本語版を比較・検討した際、日本語版が単なる翻訳ではなく、かなり改作・加筆されていることを確認したが、今回取り上げる「かち栗」も「黄栗」をかなり改作・加筆したものであることが予想される。「黄栗」（朝鮮語）は《三千里》（1936年1月、pp.277～279）に、「かち栗」（日本語）は《海を越えて》（1939年9月、pp.84～85）にあり、ページ数は共に少ないが、「かち栗」の方が活字が小さく「黄栗」より加筆部分が多いことがうかがえる。そこで本稿では、「黄栗」をA、「かち栗」をBとし、6段落からなる「黄栗」を段落ごとに見ていきながら、14段落からなる「かち栗」との比較・検討を試みる。また、「黄栗」の1段落目の最初の文章をA①1、「かち栗」の1段落目の1番目の文章をB①1というように表記することにす

る。1段落目は、A、B共に三つの文章からなっていて、春の始めの京城の街の様子が描かれている。

街には毎日風が吹いて固いコンクリートの表面の埃を白っぽく吹き上げた。¹²⁾ (A①2)

街には毎日のやうに風が吹いて、固いアスファルトの上の細かい砂や埃をひつきりなしに吹き上げてゐた。(B①2)

1段落目の2番目のAとBの文章を比較してみると、Aでは「埃を白っぽく吹き上げた。」とあるのに対して、Bでは、「細かい砂や埃をひつきりなしに吹き上げてゐた。」となっていてAの文章よりBの文章の方が、加筆されているのがわかる。

次にAの2段落目を見ると六つの文章からなっているが、Bは大幅に加筆され、Aの2段落目に当

たる部分は、Bでは3段落に分かれている。

或る日の朝、ラッシュアワーの鍾路の四つ角に白っぽく埃のたまつたつぶれた笠にみずぼらしい垢のついた白いトゥルマギ（外套）を着た老人が現れた。(A②1)

そんな、まだうすら寒い或る日の朝、ラッシュ・アワーの鍾路の四つ角に、降つて湧いたやうに一人の老人が現はれた。うす汚く穢れた、よれよれの周衣を着、頭には白つぽく埃のたまつた笠子を冠つてゐる。(B②1、2)

A②1とB②1、2を比べると、Bの方がより詳しく描かれていて、特に「降つて湧いたやうに」「うす汚く穢れた、よれよれの」というような表現によって、老人の姿がより鮮明に浮かび上がっていると言えよう。また、B②2には「周衣」「笠子」というような漢字のルビに朝鮮語音の表記があるのが注目される。¹³⁾ 同じようにB①1には、「水田」という表記もある。兪鎮午の日本語小説「夏」（《文芸》1940年7月）でも「裳」「周衣」等、22例のルビによる朝鮮語音の表記が確認されているが、¹⁴⁾ この手法が、「かち栗」ですでに使われていることも興味深い。

手には何か小さな風呂敷包みを持って、老人は、全速力で走る電車、急ぎ足で歩くサラリーマンの暴風のような朝の潮流に入って、こちらを見てはあちらを見て、ひどくとまどっていた。(A②2)

手には何か小さな白木綿の風呂敷包を下げてゐるが、気が違つたやうに物凄い速力で走り去る電車やバスや自動車や、まるで駆足でもしてゐるやうに小走りに急いで歩く學生や勤め人たちの、暴風雨のやうな流れにもまれながら、全くどうしていいものやらわからないもののやうに、あちらを見、こちらをふり向きして、一つどころに立つたまま、よろよろしてゐた。(B②3)

A②1、2とB②1、2、3を見ると、まだ寒いラッシュアワーの鍾路の四つ角が描写されていて、植民地下の朝鮮の急速な近代化によって変貌した京城の

街の様子が伝わってくる。

また、A②2に比べ、B②3でも加筆・変更があり、より具体的で細かい描写が見られる。「白木綿の風呂敷包」のような色彩感覚に訴える表現、さらに、「気が違ったやうに物凄い速力で走り去る」「駆け足でもしてゐるやうに小走りに」「流れにもまれながら」「よろよろ」というような動的な表現により、都会のめまぐるしさとそれに戸惑う老人の姿が対照的に鮮明に描き出されている。

それは全く異様な風景であつた。老人と、あたりの若い人々や高い建物やあわたましい雑踏との間には何等の調和も見出され得なかつた。老人は、いはば、時代を異にした、見知らぬ民族の、未知の文化の中へ、突然抛り出されたといったやうにしかみえなかつた。しかしそれにしては、老人の顔には、別に周章あわてたやうな様子もみえない。(B③1)

B③1は、Aにはなく、Bの完全なる加筆部分である。この加筆文章に描かれている「老人」と「何等の調和も見出され得ない」「異様な風景」とは、すなわち、日本による朝鮮の植民地支配下で、伝統的な朝鮮民族や朝鮮文化とは何等の調和もなく突然、押し進められた近代化に対する、作者、兪鎮午の抑制された批判の声ではないだろうか。また、「異様な風景」の中で、よろよろしながらも「別に周章あわてたやうな様子もみえない」老人の姿は、作者の朝鮮民族としてのぎりぎりの誇りの表われなのかもしれない。あるいは、植民地下の京城の街の急速な近代化とは無縁の存在である老人の姿に、苦悩の末の諦念に近い最後の抛り所を求めようとしているのだろうか。いずれにせよ「黄栗」を雑誌《海を越えて》に掲載するために、「かち栗」として日本語に訳すにあたり、作者があえてB③1を書き加えていることの意味を考える必要があるだろう。

通り過ぎていく人々は、その老人の風格あるさつとなびく白い髭をもう一度ずつ眺めた。(A②3)

先を急いでゐる人々は、誰もこの老人に注意を拂ふ者はなく、目の前に立ちはだかつて愚圖愚圖ぐずぐずしてゐる老人を、邪魔つ氣によけて通るか、中に

は邪慳じやけんに肩先でつき飛ばして行く者もゐるが、ふとその品のいい白い髭に気がつくと、はつとしたやうに誰でも一寸老人の顔を見上げるのであつた。(B④1)

全くそれは立派な髭であつた。鬢びんのあたりから蓬ぼう々と生えてゐるやうなそんな無恰好ぶかつこうなものではなく、下頬したあごのあたりから見事な銀白色に恰好よく生えて、房ふさと胸むねのあたりまで延びてゐるのである。よく竹林七賢こくわの故畫こくわにみるやうな風流な髭であつた。(B④2、3、4)

A②3では、単に「通り過ぎていく人々は」とあるのに対して、B④1では、「老人」が通行人に邪魔にされている様子を書き加えることにより、その情景がより具体的に浮かぶように、視覚に訴える描写がなされているのが分かる。また、A②3では、「風格のあるさつとなびく白い髭」とだけあるが、Bでは、④2、3、4が加筆されていて、「立派な」「見事な」「風流な」「髭」を「蓬ぼう々と」「房ふさと」というような擬態語を用いながら、より細かく具体的に描写して、「竹林七賢こくわの故畫こくわ」のようだと譬えている。このようなBの加筆部分を見ると、作者は、「先を急いでゐる人々」に邪魔にされている「老人」の「立派な髭」を細かく描写することにより、植民地下の急速な近代化の中で、置き去りにされ、失われてしまった伝統的な朝鮮を、象徴的に、より強調して、描こうとしたのではないかと考えられるのである。

しかしその風格ある白い髭の上にある顔は、あまりにも垢がついてしわくちゃになって光がなく、あまりにも貧しい生活に窮している彼の生活をありありと語っていた。目はどんよりと濁り、口はみっともなく開いていた。口を開けたのは、きつと周囲のあまりにも擾乱荒唐な光景に愕いてどうしていいか分からないためであつた。(A②4、5、6)

だが、髭に驚いて老人の顔を見上げた人は、今度はその顔の髭とは似てもつかない見すばらしさにつながりして、顔をそ向けてしまふのであつた。垢ばんだ、皺くちやのたるんだ皮膚、どんよりと

濁つて光澤のない眼、馬鹿のやうに髭の奥にぼかんと開いてゐる口、それは凡そ想像し得る最も惨めな人間の顔であつた。—— いはば、その身装も正直に老人の惨めな身の上を現はしてゐるのに、髭だけが、何んだか今とは違ふ昔をしのんで頑張つてゐるとでもいつたやうな風である。(B④5、6、7)

A②4、5、6では、「風格のある白い髭」を持ちながらも「貧しい生活を語る」顔つきの老人が、「周囲の擾乱荒唐な光景に愕いてどうしていいか分からない」で戸惑っている姿を比較的、簡略に描いているが、B④5、6、7では、行人の視線を通して、詳しく描かれており、より練られた表現になっている。また、Bの加筆部分を見ると「老人」の顔を「凡そ想像し得る最も惨めな人間の顔」と述べ、その「老人の惨めな身の上を現はしてゐる身装」に対し、「髭だけが」「今とは違ふ昔をしのんで頑張つてゐる」とあり、惨めな「老人」の立派な「髭」が「今とは違ふ昔」の象徴として描かれている点が注目されるのである。

暫くの間、まごついていた老人は、ずっと東大門の方へ足を運ぶと、店と店の間の少し凹んだ所を捜して、そこでまたしばらくきょろきょろして立っている。彼はもう一度、自分が立っている小さな空間を見回すと、腰をかかめてぎこちなくしゃがんで座り、手に持っていた垢の付いた風呂敷を気をつけてほどこき始めた。過ぎ行く人たちがその光景を見たならば、その老人は魔術師で、その風呂敷の中から黄金宝石の類を取り出そうとしているのかもと思っただろう。(A③1、2、3)

暫くの間、老人は同じところに立ち止まったまま人波にもまれてゐるが、何を思ったか東大門の方へ足を運び出した。やがて、大きなビルヂングとビルヂングの間の少しばかり凹んだ所を見つけ出すと、立ち止つて、またあたりを見廻はしたり、高いビルヂングの頂邊を見上げたりしてゐるが、周衣の裾を丁寧に端折つて、ビルヂングの壁に背を向けて、その小さな空間に蹲んで坐つた。そして手に持つてゐる垢ばんだ木綿の風呂敷を解き始めた。結び目を解く老人の手つきがあまりに

勿體なさうなので、一寸見ると、老人は魔術師か何かで、今にもその中から金銀寶石の類でも取出さうとしてゐるかのやうに見える。(B⑤1、2、3、4)

A③1では、老人は、しばらくの間、「まごついていた」とあるが、B⑤1では、「同じ所に立ち止まったまま人波にもまれてゐる」となっていて、Bの方が混雑した街の様子が伝わってくる。また、A③1では、「店と店」の間とあるのに対して、B⑤2では、「大きなビルヂングとビルヂング」の間となっていて、Bの方が、近代的な街並みとして描かれているのが分かる。さらに、A③1では、「きょろきょろして」とだけあるが、B⑤2では、「高いビルヂングの頂邊を見上げたりしてゐるが、周衣の裾を丁寧に端折つて、ビルヂングの壁に背を向けて」と加筆されていて、Bの方が、より細かい具体的な描写で、近代的な街の中の老人の姿がはっきりと映し出されている。次に、A③2では、老人は「風呂敷を気をつけてほどこき始めた。」とあるが、B⑤4では、「結び目を解く老人の手つきがあまりに勿體なさうなので」となっていて、より視覚に訴えるような表現になっている。

包んでまた包んだ風呂敷の中からは、黄色いかち栗が一つかみ出て来た。(A③4)

風呂敷の中からは、新聞紙の包みが出て来た。その新聞紙をまた丁寧に開くと、今度は白い朝鮮紙の包みが出て来た。それをまた大事さうに開く。と、中から出て来たのは僅かばかりの黄いろいかち栗であつた。(B⑥1、2、3、4)

A③4とB⑥1、2、3、4の描写を比べてみると、Aの方が簡略な一文であるのに対して、Bは四つの文章によって畳み掛けるように効果的に描かれている。さらに、風呂敷、新聞紙、白い朝鮮紙と「かち栗」を包んでいるものを具体的に示すことにより、「中から出て来た」「僅かばかりの黄いろいかち栗」のより明瞭な視覚化に成功していると言えよう。

老人は風呂敷を路上に広げて敷き、そのかち栗を小さい一握りずつの山に作った。暫くかかって六

つの山を作って置いてから、今度は眼を瞬きながら、こっちの山、あっちの山を代り番こに覗き込みながら、かち栗ひとかけらをつまんで、こっちの山からあっちの山へ移して置いた。そうしてはまた暫く覗き込む。今度はあっちの山からすこし少ないかち栗のかけらをつまんで、またこっちの山へ移して置く。しかしいくら熱心に彼の商品を陳列して置いてももう彼の髭さえ覗き見て行く人はいなかった。(A③5、6、7、8、9)

老人は木綿の風呂敷を地べたに敷き、その上に朝鮮紙を重ねて、そのかち栗を小さな一握りづつの山にわけ始めた。殆んど十分もかかって、やつと六つの山が出来上った。が、今度は、眼を瞬きながら、それらの小さな山々を見較べ始めた。そしてこっちの山から栗を一つとつて、あっちの山に移した。それでも老人はまだ気が済まぬらしく、また暫らく一心にみつめてゐるが、今度は今一つつけ加へたばかりのところから、小さなかけら一つとつて、逆にこっちの山の方へ移した。老人は彼の商品に少しも大小の差がないやう、眞心こめて公平にわけてゐるのである。

だが、こんな彼の努力がラッシュ・アワーのあわただしさと何等関係のないものであることは云ふまでもない。勤め人たちは、勤めの時間がいよいよ迫つて来たので、ますます歩を早めて老人の前を通り過ぎるだけであつた。(B⑦1、2、3、4、5、6、⑧1、2)

A③5、6、7、8とB⑦1、2、3、4、5、6を比べてみると、老人がかち栗を並べる様子が、詳しく書かれているが、AよりBの方がさらに細かく書き加えられている。たとえばA③5では「風呂敷を路上に広げて敷き、」とあるが、B⑦1では「木綿の風呂敷を地べたに敷き、その上に朝鮮紙を重ねて、」となっている。また、A③9では「熱心に」とだけあるが、B⑦5では、「それでも老人はまだ気が済まぬらしく」、B⑦6では「老人は彼の商品に少しも大小の差がないやう、眞心こめて公平にわけてゐるのである。」とあって、Bの方が、かち栗を並べている老人の気持ちがいっしょりと書き込まれている。また、A③9では「彼の髭さえ覗き見て行く人はいなかった。」で終わっているが、Bでは⑧1、2が加筆

されていて、「ラッシュ・アワーのあわただしさ」や「勤め人たちは、勤めの時間がいよいよ迫つて来たので、ますます歩を早めて」等の表現により、ラッシュアワーの忙しい街の雰囲気が描かれ、「こんな彼の努力がラッシュ・アワーのあわただしさと何等関係のないものである」として、忙しい街の風景とかち栗を並べる老人の姿が対照的に表現されている。

午後になると、その日もまた風が起こった。風は埃をもたらし、人の目へ鼻へ店の陳列台のガラスへ、はためく旗へ入り、うすら寒かった。しかし風が止むと、それでも春の日なので、陽ざしがぼかぼかと街を射した。(A④1、2、3)

ラッシュ・アワーが過ぎ去ると、街は急に静かになった。と、老人は先の新聞紙を地べたに敷いて、その上に胡床あぐらをかいてべたりと坐つた。さすがに寒いらしく袖手を組んでゐるが、やがて睡ねむくなつたのであろう、静かに眼をつぶつた。十一時頃にもなると街はまたそろそろざわめき出したが、老人は先からの姿勢を變へなかつた。まるで彫像か何かのやうであつた。風がまた起つた。埃を吹き上げて、相變らずうす寒かつたが、それでも一しきり吹いて凪ぐと、陽ざしはぼかぼかと暖かつた。その暖かい日を浴びて、老人は何時までも居睡ねむりをつづけてゐるやうにみえた。(B⑨1、2、3、4、5、6、7、8)

この部分を比べてみるとAでは、一行、行間をあけて「午後になると、その日もまた風が起こった。」という文章で④段落目が始まっているが、Bの⑨段落目では、ラッシュアワーの後の午前中の街と老人の様子が、詳しく加筆されているのが分かる。

朝、鍾路の通りで、商いを開いていた老人は、バゴダ公園の前へ場所を移した。もっとよく売れる場所を求めて行ったのではなく、交通整理をする巡査に四つ辻の商い場所を追い出されたのだった。しかしこの場所でも彼のこの貴重な商品を見て行く人は一人もいなかった。(A④4、5、6)

が、暫くすると、見廻りの巡査がやつて来て老人を怒鳴り起した。そんなところでそんなにしてゐると交通妨害になるといふのである。老人は始めの中はきよとんとしてゐたが、巡査のいふことがわかると、素直にその小さな店をたたんだ。そしてとぼとぼとまた東大門の方へ歩き出した。が、パゴダ公園前まで来ると、そこの廣場の片隅に、また先のやうにして店を開いた。隣では売薬商らしい黒眼鏡をかけた男が何か盛んに我鳴り立てて彌次馬連を澤山集めてゐたが、一山五錢也の老人の店先には、ここでも誰も眼をくれる者はゐなかつた。(B⑩1、2、3、4、5、6)

ここでも A では、「朝、鍾路の通りで商いを開いていた老人」が、「パゴダ公園の前へ場所を移した」とだけ、簡略に記述されていて、その理由を「交通整理をする巡査に四つ辻の商い場所を追い出されたのだった。」と説明している。これに対して B では、「その暖かい日を浴びて、老人は何時までも居睡りをつづけてゐるやうにみえた。が、暫くすると、見廻りの巡査がやつて来て老人を怒鳴り起した。」「老人は始めの中はきよとんとしてゐたが、巡査のいふことがわかると、素直にその小さな店をたたんだ。そしてとぼとぼとまた東大門の方へ歩き出した。が、パゴダ公園前まで来ると、そこの廣場の片隅に、また先のやうにして店を開いた。隣では売薬商らしい黒眼鏡をかけた男が何か盛んに我鳴り立てて彌次馬連を澤山集めてゐた」と加筆されている。A の描写の方が、やや説明的で、稚拙な表現であるのに比べ、B では、「居睡り」「怒鳴り起した」「きよとんと」「素直に」「とぼとぼ」「隣では売薬商らしい黒眼鏡をかけた男が何か盛んに我鳴り立てて彌次馬連を澤山集めてゐた」というように、より詳しく描かれていて、視覚、聴覚に訴える表現や擬態語が用いられ、老人の動きや心理描写、賑やかな街の様子と対照的な老人の姿がより鮮明に描き出されている。

また、植民地支配を連想させる「巡査」に対して「素直」に従う「老人」の姿が、象徴的である。さらにここで、「巡査」に追い出された「老人」が、あえて、三一独立運動の拠点となった「パゴダ公園」の前に行くことも作者が何か意図を持って描いたのではないかと考えられるのである。

赤ん坊の便の塊ぐらい少しずつ作って置いたかち栗の山は、埃を白っぽくかぶったそのまんまである。老人の濁った瞳には、朝とは違って焦りの色があった。地べたに胡坐を組んでべたっと坐り、彼は行きかう人を哀願する眼で見上げた。老若男女、様々な人が色とりどりの服を着て、それぞれ忙しく急ぎ足で歩く。誰も彼に注意を向ける人はいなかった。老人は街に捨てられた紙屑のように、いつまでもその場所に坐っているのであった。(A④7、8、9、10、11、12)

何時までたつても、老人の^{かち栗}は一山も賣れなかつた。たうとう小さな黄ろい山々には、白っぽく埃がつんだ。恐らくこの^{かち栗}は、昨日も一昨日もどこかの道端で今日と同じく埃をかぶったものであらう。老人は相變らず眼をつぶつてはゐるが、もう居睡りをしてゐるのではないので、ときどき眼を開いては、朝からそのままになつてゐる^{かち栗}の山を怨めしさうに眺め、そして通り行く人々の顔を哀れっぽく見上げるのであつた。老いも若きも男も女も、色とりどりの春服を着て、それぞれ忙しさうに通つて行く。だが、この老人に注意を向ける人は相變らず一人もゐなかつた。(B⑪1、2、3、4、5、6)

ここで注目されるのは、A の「赤ん坊の便の塊ぐらい少しずつ作って置いたかち栗の山」「老人は街に捨てられた紙屑のように、いつまでもその場所に坐っているのであった。」という表現である。これは、B にはない描写で、特に「赤ん坊の便の塊ぐらい」という表現は、朝鮮語独特の滑稽な比喩である。A と B を比較すると、全体的に B の方が加筆されていて、より細かく描写されているのであるが、この部分では、A の「かち栗」と「老人」の素朴な描写が、うまくなされていると感じられる。

長い春の日の午後も過ぎ去り、日が仁王山の彼方へすっかり沈み、街には燈が星のように灯つた。パゴダ公園の前の老人はその時まで、かち栗、六つの山を前に置いたまま、身じろぎもしていないでいる。客を呼ぶカフェのジャズ、そのあい間あい間にどこからか風に乗って流れてくる街の曲

馬団のラッパの音。人々はいっそう歩みを早くして、電車、自動車は狂ったように走り出す。しかし老人はそのまま坐っていた。疲れてそうなのか、全てを断念したのか、老人は力なく眼をうとうとと閉じて、眠たい人のようにこくりこくりとする。しかし彼に注意する人はそれでもいない。(A⑤1、2、3、4、5、6、7)

たうとうと長い春の日も暮れて、仁王山の彼方へ日が沈むと、まだうす明るい黄昏なのに、街にはぱつと燈がついた。星空のやうに美しい。老人は、それでもまだ六つのかち栗の山を前にして、さつきのやうな姿勢を崩さないである。(B⑫1、2、3)

急に元氣づいて来た、客を呼ぶカフェーのジャズ。そのあい間あい間にどこからか風に乗って流れてくる曲馬団のらしいコルネットの響。夕暮れになると、人々はますます歩を早め、電車や自動車もまた氣狂のやうな勢で走り出した。だが、老人は相變らずそのままの姿勢をつづける。ひどく疲れたのだらう、だるさうに眼を閉ぢると、居睡りでもしてゐるやうに、こくりこくりと體を前後にふり始めた。風が吹くたびに髭は白くなびく。それでも、彼に氣を向ける人はまだゐない。(B⑬1、2、3、4、5、6、7)

この部分でも A では、⑤の一段落で書かれているが、B では、⑫、⑬の二つの段落で書かれている。文章の数も A では7つの文章であるのに比べ、B では10の文章からなっていて、Bの方が加筆されているのが分かる。例えば A⑤1の文章は、Bでは⑫1、2の二つの文章になっていて、Aの「街には燈が星のやうに灯った。」という表現が、Bでは「街にはぱつと燈がついた。星空のやうに美しい。」という表現に書き換えられている。Aの「星のやうに灯った。」という簡略な描写に比べ、Bでは「ぱつと」という擬態語が用いられ、二つ目の文章で「星空のやうに美しい」と書き加えられていて、「街の燈」がより美しく鮮明に描き出されていると言えよう。また B では「急に元氣づいて来た」「夕暮れになると」「勢で」が加筆されていることにより、夕暮れの街の臨場感が増している。さらに A の「ラッパの音」が、B では「コルネットの響」に

なっていて、より洗練された表現で近代的な街の雰囲気伝えていいる。「老人」の描写についても A では「そのまま坐っていた」「こくりこくりとする」とあるが、B では「相變らずそのままの姿勢をつづける」「だるさうに」「こくりこくりと體を前後にふり始めた」となっていて、Bの方が「老人」の動作がよりはっきりと描かれている。また B には「風が吹くたびに髭は白くなびく。」という一文が書き加えられていて、ここでも「老人」の象徴的な「髭」が強調されているのが注目されるのである。

たうとう老人はかち栗の山をもと通り風呂敷に包んだ。彼は何か貴重品でも扱うやうに氣をつけて包み、その場所を立ちあがり、あてもなく歩を進め始めた。彼の灰色の影は、どこかの路地裏の暗闇の中へ、暗闇に溶けるやうに消えてしまった。(A⑥1、2、3)

たうとう老人は、やつと諦めがついたのだらう、かち栗をまた大事さうに風呂敷に包んで立ち上つた。そして、ふらふらと東大門の方へ歩き出した。どこへ行くのだらう。誰も知る者はゐない。が、間もなく彼の暗い影は、どこかの路地の暗闇の中へ、その暗闇に溶けこむやうに消えてしまった。(了) (B⑭1、2、3、4、5)

これは作品の最後の部分の描写である。ここでも A より Bの方が加筆されている。(B⑭1の「やつと諦めがついたのだらう」という表現は、A⑥1の文章には無いが、前の段落 A⑥6の文中に、「全てを断念したのか」という表現があり、これに呼応している。) A⑥2の文章では、「何か貴重品でも扱うやうに氣をつけて包み、その場所を立ちあがり、あてもなく歩を進め始めた」とあるが、Bでは「大事さうに風呂敷に包んで立ち上つた。そして、ふらふらと東大門の方へ歩き出した。」と二つの文章に分けられている。そして「ふらふらと」という擬態語が用いられ、「東大門の方へ」という具体的な方角が示されて描かれているのが分かる。また A では「あてもなく歩を進め始めた」とだけあるが、Bでは「どこへ行くのだらう。誰も知る者はゐない。」という二つの文章が加筆されている。最後の文章も A では「彼の灰色の影は、」で始まっているが、B

では「が、間もなく彼の暗い影は」となっている。こうした表現により A に比べ B の方が、より時空の流れを感じさせる描写で終わっていると言えるだろう。

3. おわりに

以上、兪鎮午の短篇小説「黄栗」と「かち栗」を比較・検討してみた。その結果、「かち栗」は、朝鮮語作品「黄栗」を日本語に翻訳したものではあるが、単なる日本語訳ではなく、全面的に書き改められていて、大幅に加筆・修正されていることが確認された。ここでもう一度、この二作品の比較・検討を通して確認できたことについて、いくつかまとめておく。

まず日本語作品「かち栗」には、「水田」「周衣」「笠子」というような漢字のルビに朝鮮語音の表記があるのが注目された。「かち栗」が発表された翌年 1940 年 7 月に、日本の文芸雑誌《文芸》に掲載された兪鎮午の日本語小説「夏」でも「裳」「周衣」等、22 例のルビによる朝鮮語音の表記が確認されているが、この手法が、「かち栗」ですでに使われていることは興味深いことであると言えよう。

次に作品「黄栗」と「かち栗」では、植民地下の朝鮮の急速な近代化によって変貌した京城の街の様子とそれに戸惑う「老人」の姿が対照的に描き出されているのであるが、特に注目されたのが、「かち栗」三段落目の最初の文章である。この文章は「かち栗」の完全なる加筆文章であるが、「黄栗」を雑誌《海を越えて》に掲載するために、「かち栗」として日本語に訳すにあたり、作者があえてこの文章を書き加えていることの意味を考える必要がある。この加筆文章に描かれている「老人」と「何等の調和も見出され得ない」「異様な風景」という表現には、日本による朝鮮の植民地支配下で、伝統的な朝鮮民族や朝鮮文化とは何等の調和もなく突然、推し進められた近代化に対する、作者・兪鎮午の抑制された批判意識を、また、「異様な風景」の中で、よろよろしながらも「別に周章てたやうな様子もみえない」老人の姿には、作者の朝鮮民族としてのぎりぎりの誇りの表われを見てとることができるのではないだろうか。さらには植民地下の京城の街の急速な近代化とは無縁の存在である老人の姿に、作者は

朝鮮社会の否応ない変貌に対する苦悩の末の諦念に近い最後の抛り所を投影しているのではないかと推測される。

作品「黄栗」と「かち栗」を比較してみると、全体的に「黄栗」に比べ「かち栗」の方が加筆され、具体的で細かい描写、動的な表現、擬態語の多用、視覚、聴覚に訴える表現等が用いられているのが分かる。例えば「かち栗」では、「老人」の「立派な髭」が、「蓬々と」「房々と」というような擬態語を用いながら、より細かく具体的に描写されていて、「竹林七賢の故畫」のようだと譬えられている。このような「かち栗」の描写を見ると、作者は、「先を急いでる人々」に邪魔にされている「老人」の「立派な髭」を細かく描写することにより、植民地下の急速な近代化の中で、置き去りにされ、失われてしまった伝統的な朝鮮を、象徴的に、より強調して描こうとしたのではないかと考えられるのである。

また、京城の街の描写も「黄栗」に比べ「かち栗」の方が、より近代的な街並みとして描かれていて、ラッシュアワーの忙しい街のあわたしい雰囲気の方がより詳しく描かれ、「かち栗」の九段落目では、ラッシュアワーの後の午前中の街と老人の様子が、詳しく加筆されているのが分かる。

作品「黄栗」と「かち栗」に描かれた「老人」は、植民地下の急速な近代化の流れの中で戸惑う「朝鮮」の象徴であり、みすぼらしい、邪魔にされる「老人」の姿を通して、作者の「朝鮮」に対する単なる懐古趣味の美化された意識ではなく、冷徹な、ある意味、自虐的とも言える祖国「朝鮮」に対する意識を読み取ることができるのではないだろうか。また、「老人」の「髭」が、「今とは違ふ昔」の象徴であるとするならば、みすぼらしい「老人」が売ろうとしている、しかし、だれも振り向かない「黄栗」「かち栗」は、何の象徴なのだろうか。作者は、「黄栗」「かち栗」と題して何を描こうとしたのだろうか。このことに思いを致すと、この作品は少なくとも単なる世態小説ではなく、ましてや親日作品ではないと言えるのではなからうか。

本稿では、兪鎮午の朝鮮語小説「黄栗」とそれを翻訳・改作した日本語小説「かち栗」とを比較・検討してみたが、「黄栗」に比べ、「かち栗」の方が、加筆・修正され、作品としての完成度が高く、「か

ち栗」の加筆・修正部分に注目すると、「かち栗」の方が、より植民地下の朝鮮を強調して描かれていることが確認できたと考える。これは、兪鎮午の代表作「金講師と T 教授」の朝鮮語版と日本語版の比較・検討作業を通して、確認したこととも共通するものである。

今後の残された課題として、兪鎮午の他の作品についても朝鮮語作品とそれを日本語に翻訳した作品の比較・検討を試みたいと考えている。

註

- 1) 白川春子、「兪鎮午の日本語小説について」、『下関市立大学創立 50 周年記念論文集』2007 年 3 月、pp.229~239
- 2) 同上、p.238 及び註 40) 参照
- 3) ・白川春子、「兪鎮午の「金講師と T 教授」について」、平成 11~13 年度科学研究費基盤研究 B (1) 研究成果報告書『朝鮮近代文学者と日本』、サナエ (制作)、2002 年 2 月、pp.81~94
・白川春子「兪鎮午作「金講師と T 教授」小考—T 教授とその他の登場人物を中心に—」、『下関市立大学論集』第 47 巻第 3 号、2004 年 1 月、pp.77~89

なお、朝鮮語の「金講師と T 教授」の原題は、「金講師와 T 教授」であるが、便宜上、「金講師と T 教授」に統一して表記した。

- 4) 註 1) 参照
- 5) 原題は「스리」
- 6) 註 1) 参照
- 7) 金根洙『韓国雑誌史』청록출판사 (青鹿出版社)、ソウル、1980 年、p.149
- 8) 《三千里》1936 年 1 月、p.320、原文は朝鮮語。以下、原文の日本語訳はすべて筆者による。なお、便宜上、直訳調とした。
- 9) 原文は朝鮮語。
- 10) 作品集の原題は『봄』で、長編小説の原題は、「受難의 기록」
- 11) 原文は (都會 의 한스케취)
- 12) A の引用文の原文は朝鮮語である。原文の日本語訳はすべて筆者による。なお、便宜上、直訳調とした。また、A、B の引用文の下線は筆者による。以下同様。
- 13) 本稿では、煩雑になるため、便宜上、省略したが、作品「かち栗」の漢字 (数字以外) には、もともと全てルビがある。これは、雑誌《海を越えて》全文の方針であるようだ。ただし日本語読みのルビはひらがなで、朝鮮語音の表記はカタカナである。
- 14) 前掲、拙稿「兪鎮午の日本語小説について」p.230